

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第116号 2024年8月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 通信制高校における郵便資料を活用した授業実践 — 一切手・年賀状の活用を事例に—	八田 友和	2
体験的文献紹介(65) — 香川県と愛媛県の中学校探索—	神辺 靖光	7
大東文化大学教授酒井清六(生物学・化学)のインタビュー — 学生サークル誌『エリキサ』第15号(1992年12月)掲載—	谷本 宗生	17
大正時代の女子高等教育(71) 神戸女学院草創期に貢献した女性宣教師たち	長本 裕子	20
進学案内書にみる戦前期東京の予備校(5): 『最近東京遊学案内』(明治40年)(3)	吉野 剛弘	28
旧制灘中学の教育目標と生徒の活動(11)	富岡 勝	31
刊行要項(2015年6月15日現在)		36
短評・文献紹介		37
会員消息		38

コラム

通信制高校における郵便資料を 活用した授業実践 一切手・年賀 状の活用を事例にー

はった ともかず
八田 友和

(クラーク記念国際高等学校)

1. はじめに

本稿の目的は、通信制高校で行った郵便資料¹⁾を活用した授業実践の概要を紹介することにある。筆者が勤務するクラーク記念国際高等学校姫路キャンパス(以下、「クラーク姫路校」と表記する)では、郵便

局が実施する「2023年度 手紙の書き方体験授業」(以下、「書き方体験授業」と表記する)を利用し、様々な教育活動に取り組んできた。また、書き方体験授業に付随して多様な郵便資料(使用済み切手や絵葉書、軍事郵便など)を用いた実践を行ったため、その一端を紹介する。

2. 実践の概要

ここでは、クラーク姫路校で行った郵便資料を活用した実践として、「使用済み切手でしおりを作ろう!」「ご当地キャラクターに応援の年賀状を書こう!」を取り上げ、その概要を紹介する。

なお本稿で取り上げた実践以外にも、いくつか書き方体験授業を活用した実践に取り組み、成果報告を行っている。例えば、葉書を活用したキャンパス間交流の実践に関しては、拙稿「通信制高校における地域資源を活かしたキャンパス交流の一考察(1)ーハガキでの地域紹介を事例にー」(『関西生涯教育研究論叢』第3号, 2014年, pp.35-42 収録)で紹介している。また、絵葉書・軍事郵便を活用した実践に関しては、拙稿「博物館機能の疑似体験を通じて資料に込められた思いを読み解く活動」(『リカレント研究論集』第4号, 2024年, pp.76-89 収録)にて紹介している。併せてご笑覧いただき、ご意見、ご感想などいただけると望外の喜びである。

(1) 使用済み切手でしおりを作ろう!

ここでは、使用済み切手を使用した「しおり(本に挟むしおり)」の作成について紹介する。

まず、授業の冒頭で「郵便の仕組み」「使用済み切手の存在、活用方法」「本実践の目的・流れ」について紹介を行った。そのうえで、しおり作りの概要について説明したうえで、完成形について説明を行った(図1)。

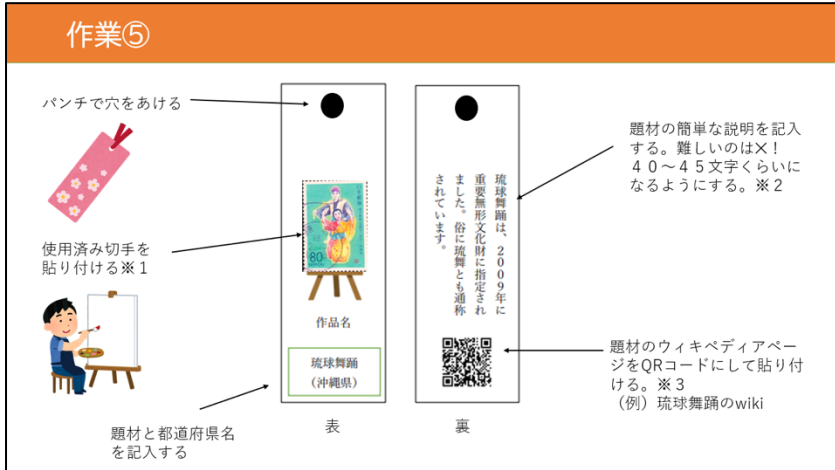


図1 使用済み切手しおりの完成図

次に、3~4人で1つのグループを作り、大量の使用済み切手の中から「都道府県名・資料名(題材の名称)が書かれた縦長の使用済み切手」を10枚ずつ選んでもらった(図1※1)。

そして、切手に描かれた題材について調べ、その概要を40字程度の簡単な文章にまとめてもらった(図1※2)。最後に、題材のWikipedia記事のQRコードを作成してもらった(図1※3)。作成したQRコードや文章をフォーマットに落とし込むとデータの完成である。

完成したデータをプリントアウトし、型通りに切り、貼り付けるとしおりの形になる(図2)。

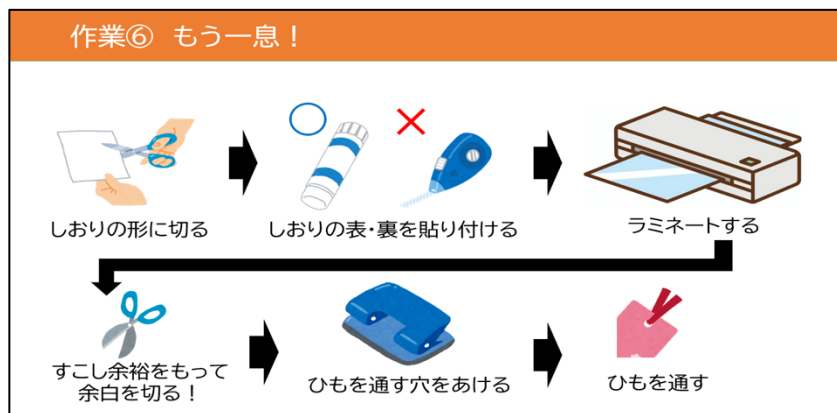


図2 使用済み切手しおり 作成の手順

完成したしおり(写真1)は、クラーク姫路校の校舎で配布した。また、2023年11月に姫路駅前で行われた「ひめじ de ボランティア 2023『ひめボラ市』」においても、本部テントにて配布が行われた。



(写真1) 完成したしおり

(2) ご当地キャラクターに応援の年賀状を書こう！

日本郵便株式会社東北支社が行う、「ご当地キャラクターに年賀状を書こう！」²⁾に、クラーク姫路校の3年生が参加した。この事業は、手紙の振興および地域の活性化を図ることを目的に、東北地方のご当地キャラクターに応援の年賀状を送るイ



メントである。なお、届いた年賀状には返事が返ってくる³⁾。生徒たちは「ゆるキャラに年賀状かけるんだ」「こんなにたくさんのゆるキャラがいるんだ(142体のキャラクターが掲載されている)」と興味をもって取り組んでくれた。葉書の書き方を別の機会学習していたため、作法やルールを思い出しながら葉書を書くよい機会となった。

3. さいごに

本稿では、クラーク姫路校で行った郵便資料を活用した授業実践について、概要を整理・提示してきた。

今後の展望としては、①引き続き、使用済み切手を使用した授業実践・ワークショップを行っていくこと、②2025年に戦後80年を迎えることを踏まえて、軍事郵便を扱った授業開発を行うことが挙げられる。実践にあたっては、専門家や関係機関と連携した取り組みを模索していきたい。

【謝辞】

本実践を行うにあたって、郵便局が行う「2023年度手紙の書き方体験授業」を活用させていただきました。この場を借りて御礼申し上げます。また、「ひめじdeボランティア2023『ひめじ市』」でしおりを配布するにあたって、姫路市市民活動・ボランティアサポートセンターの協力を受けました。併せて御礼申し上げます。

なお授業の概要は、クラーク姫路校のサイトでも紹介されています。併せてご覧ください。

【国際総合】使用済み切手を使ってしおり作りを行いました！

(2024年7月30日確認)

https://www.clark.ed.jp/campus/hyogo-himeji/himeji-learns/85555/?doing_wp_cron=1708947383.3382389545440673828125

【註】

- 1) 本稿では、実践で扱った葉書・使用済み切手・絵葉書・軍事郵便など、郵便に関する資料を「郵便資料」と表記する。
- 2) 取り組みの詳細は、郵便局「ご当地キャラクターに応援の年賀状を書こう! の実施」(2024年7月30日確認)を参照のこと。

https://www.post.japanpost.jp/notification/pressrelease/2023/02_tohoku/1031_01.html

- 3) 必ず返事の手紙が返ってくるわけではないが、「返信の条件」を満たすと返事が返ってくる。実際、クラーク姫路校にも何通か返事が届いている。

【参考文献】

- ・郵便局「手紙の書き方体験授業」(2024年7月30日確認)
<https://www.schoolpost.jp/>
- ・クラーク記念国際高等学校姫路キャンパスホームページ(2024年7月30日確認) <https://www.clark.ed.jp/campus/hyogo-himeji/>

体験的文献紹介(65)

－香川県と愛媛県の中学校探索－

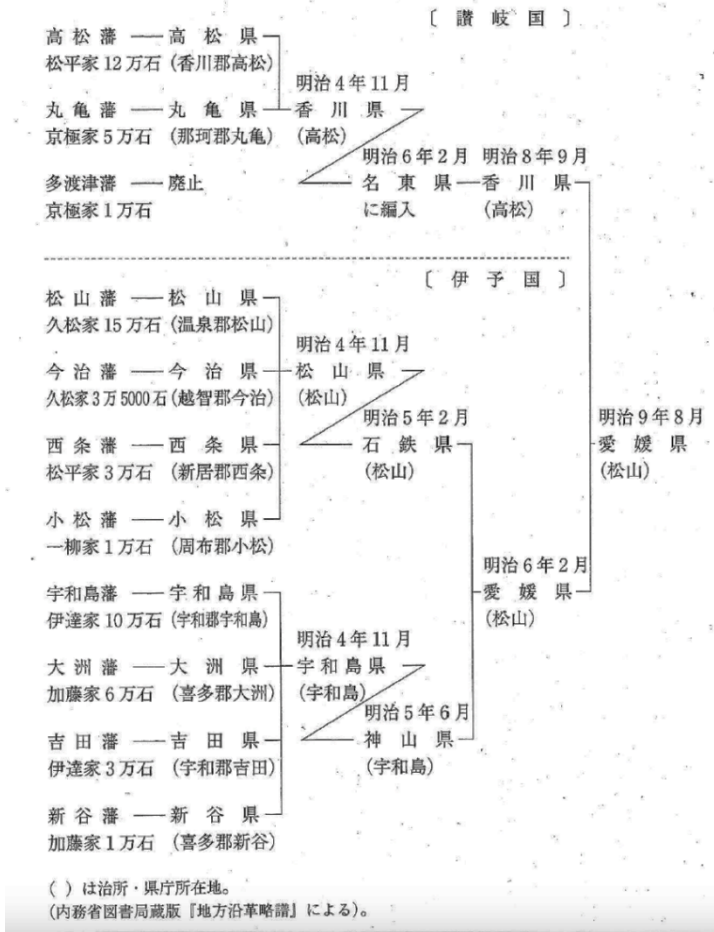
かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

I 香川県を舞台に中学校の起源を探る

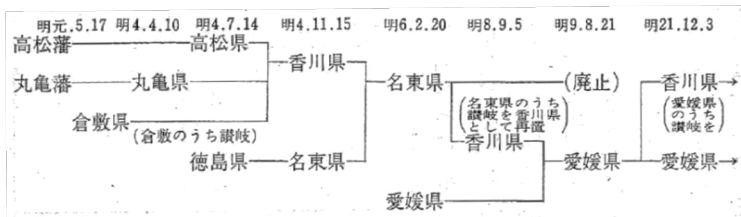
平成4年春、威勢のよいフレッシュマンが数人、大学院の神辺ゼミに入ってきた。教職経験者もいたが、文学部や教育学部を卒業して直ちにわが大学院に新入してきた感があった。とにかく熱っぽい。神辺ゼミ特有の教育史資料探索旅行のことは承知していて本年のターゲットを問うてきた。かねてから環瀬戸内海を構想していたから兵庫県の対岸、播磨灘はりまなだを隔てた香川県だと答えた。わが兵庫教育大学と姉妹校の関係にある鳴門教育大学は隣県の徳島県だが、讃岐の香川県に近いから香川県の調査に不便はない筈。さらに鳴門教育大の教育史担当教授が四国の教育史資料を収集しているからそれも見たいと言ったら納得した。こうしてまず鳴門教育大を訪問して丁寧な対応案内を受けた後、香川県各地の大学や図書館で教育史資料を調査して、この史料調査旅行は成功裏に終わった。

さて当地方の中学校史研究である。明治維新を迎えた時、讃岐国には高松、丸亀たどつ、多度津の3藩があり、伊予国には松山、宇和島、大洲、今治、西条、吉田、小松、新谷の8藩があった。廃藩に際し、多度津以外の各藩は新県になったが、伊予の中東部は石鉄県いしづちに、南部は神山県かみやまになり、明治6年2月、石鉄、神山県を合わせて第1次愛媛県が誕生した。一方、讃岐国は第1次香川県→名東県→第2次香川県をへて明治9年8月、愛媛県に併合され、ここに讃岐・伊予2国の第2次愛媛県が成立した。明治21年12月、讃岐は念願の独立を果たし、現在の香川県・愛媛県になる([表1][表2]を参照)。

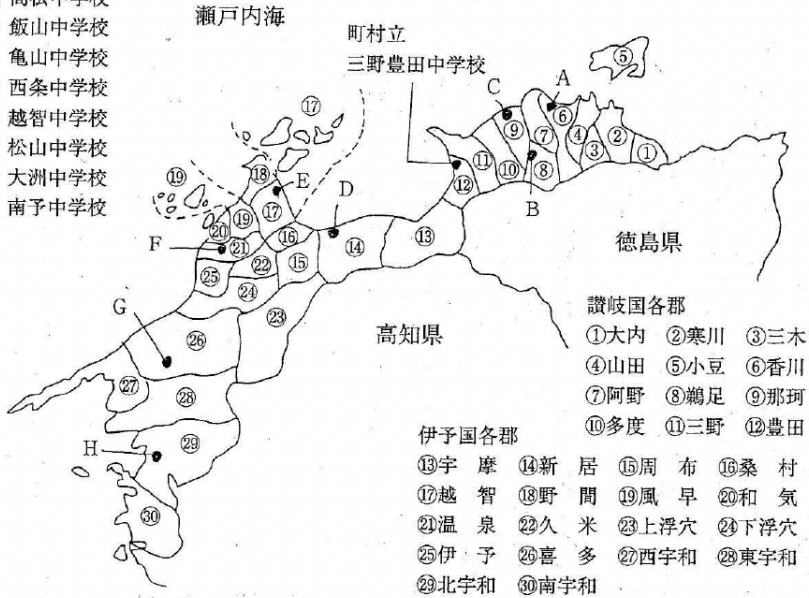
〔表1〕 明治初期・讃岐伊予両国愛媛県成立表



〔表2〕 香川県の成立



- A 高松中学校
- B 飯山中学校
- C 亀山中学校
- D 西条中学校
- E 越智中学校
- F 松山中学校
- G 大洲中学校
- H 南予中学校



〔図1〕 1876～88年愛媛県内各郡と県立・町村立中学校設置位置

1888年12月愛媛県各郡略図（『愛媛県史・近代上』99頁）。

前に述べた如く「学制」公布の際、大学区は政府が指定したが、中学を設くべき区域は中学区として府県に委任した。明治9年当時の中学区をみると香川県は第3大学区を第31番～34番、愛媛県が第4大学区第32～37番までで全部で10中学区になっていた（〔図1〕を参照）。ところが、この地方では中学区にお構いなく旧藩校を土台に中学校を次つぎにたて始めたのである。その実態は後に述べるとして本稿はまず讃岐→香川県の風土について述べておこう。

香川県は讃岐一国からなり、四国の北東部に位置して瀬戸内海に面している。東は播磨灘、北は備讃瀬戸、西は燧灘を望み、南は讃岐山脈によって徳島県に接している。面積は最小県であるが平野部が県土の半分を占めて住み易い。瀬戸内海の小豆島、直島諸島、塩飽諸島など備讃諸島の100余の島々を含んでいる。讃岐は晴天日数が多く雨量が少ないから塩田に適しているし、綿→木綿、砂糖黍→砂糖の培養・製造もできる。これらの特産物を「天下の台所」と言われ

た大阪に運び売り捌いたので県民は大いに潤った。香川県では塩・綿・砂糖を讃岐三白と誇らしく言う。

鎌倉時代、讃岐の守護は幕府の執権北条家の一族が独占していたが、南北朝の中頃から、室町幕府の将軍補佐役たる管領になった有力守護大名の細川家に移った。江戸時代になるとご三家水戸藩宗門の松平家がこの任を勤めている。要するにその時々^{しつげん}の最高権力者の代理人が讃岐の地を護ってきたのである。それは源平合戦以来、大規模になった兵卒・軍馬・武器輸送に瀬戸内海の玄関番たる讃岐の護りが重要になってきたからであろう。明治新政府にその地位を譲った讃岐の大名は高松藩12万石の松平頼聰(水戸徳川のながれ)と丸亀藩6万石の京極朗徹の2人であった。

このように幕府の代理人となって土地人民を治める武家大名がいたが、讃岐には幕府から朱印状を受け、領主として知行する金毘羅大権現という寺社があった。その起源ははっきりしないが中世末期、航海の神として海で働く人びとの間で信仰されていたという。丸亀から川を遡り琴平山(象頭山とも言う)にあるが、

金毘羅船々、追手に帆かけてシユラシユシユシユ
回れば四国は讃州那珂の郡象度山金毘羅大権現

という歌詞は今でも全国で歌われている。

このように異色の土地柄ゆえ、輩出した人物も一風変わっている。学者をあげれば古賀精里・尾藤二州とともに寛政の三博士といわれた柴野栗山や朱子学派の藤沢南岳らがいるし、洋学ではオランダ語をはじめ、本草学、医学をおさめ、エレキテル(発電機)まで作った平賀源内など枚挙にいとまがない。一方、幕末になると勤王の志士をかくまう日柳燕石のような任侠の博徒も現われた。長州の吉田松陰、高杉晋作、土佐の中岡慎太郎らは彼の擁護のもとに活躍することができたのである。

明治以後になるとまずわれら教育学の大先達・谷本富博士をあげねばなるまい。慶応2(1866)年、高松の生れ。東京大学文学部卒業後、山口高等学校

教頭をはじめ、東京高等師範学校・京都大学等の教授を歴任しながら新教育の理論と実践を説いた。

東大総長・南原繁も香川県出身、文学では奇人作家の宮武外骨をはじめ、「藤十郎の恋」や「父帰る」の菊池寛、「二十四の瞳」の壺井栄などがいるし、政治家では戦前、文部・鉄道・農商務の各大臣を歴任した三土忠造^{みつち}、戦前、強力な吉田内閣を倒して鳩山内閣を成立させた三白眼^{さんぱくがん}の三木武吉、さらに西尾末広、大平正芳等^{せいせい}、多士済々の観がある。

II 愛媛県の中学校資料探索

香川県を探索した翌年、愛媛県の中学校探索を開始した。この探索には愛媛県出身の門由美子^{かどゆみこ}さんの絶大な支援があったことを感謝をこめて記さねばならない。門さんは愛媛県八幡浜市の人で土地の高校を卒業すると埼玉大学で教育学を学び卒業後、故郷の八幡浜で小学校の教諭をへてわが兵庫教育大学大学院で教育学の研究に入った。大学院ではデューイ流の新教育を研究するので西洋教育史専攻の若い助教授のゼミに加わり、神辺のゼミ生ではなかったが、ある時、卒業の単位にならなくてもよいからという条件づきで、わがゼミ生に加わったのである。

わがゼミの教育資料探訪旅行のことは充分了解ずみて、愛媛県出身の兵教大大学院生や当時、東京商科大学大学院生であった弟さんと呼び帰して自動車2台を連ねての県内旅行になった。松山、大洲など明治の中学校がありそうな所を^{しらみつぶ} 風潰しに調べたが大収穫に狂喜したのは宇和島市の教育史料であった。教科書はじめ掛図類など教具教材が部門別に分類、整理されて来観者にわかり易くできていた。改めて門さんの周到な計画準備に感謝した。

門さん^{かど}のその後の私^{かか}との関わりを記しておこう。この時、門さんにはビリー・マラー^{マラー}ード氏という婚約者がいて、教育資料探索旅行の翌年、八幡浜の教会で結婚式をあげたのである。マラーード氏は名門コロムビア大学の言語学科の出身、各国語に通じているが、日本語は特に達者であった。その才を買われてニューヨークタイ

ムスの日本特派員になり、この時期は八幡浜市に在住して教育事情を調査していたのである。結婚式には兵教大の教員数名が呼ばれて和英両国語で祝辞を述べた。私もその一人である。結婚式にはマラードさんの父上が来場されたが、コロムビア大学の教授と紹介された。

結婚後、マラード氏は東京特派員になり、東京目黒区に居を構えて我が家とは家族ぐるみのおつき合いになった。やがてお子さんが生まれて長女は沙良、次女は花と名づけた。日本でもアメリカでも通じるというわけである。小中学校は母親の在日外国人学校で学んだがハイスクールや大学は米国の福祉関係の学校に進み活躍している。マラード記者の姿は時々、首相官邸や国会で記者会見でテレビを通して見たが颯爽たるものであった。沙良さんと花さんはしばしば太平洋を渡って日米間を行き来したが、彼女たちが日本に帰るとマラード夫妻ともどもわが家に集り、持参の食物を我が家の台所でマラード氏が調理し、神辺、マラード両家族が一つになって楽しんだ。マラード由美子夫人は東京の外国人学校に勤務し、国際情勢の変化に対応しながらその改善に尽力している。

明治維新を迎えた時、伊予国には松山、宇和島、大洲、今治、西条、吉田、小松、新谷の8藩があり、讃岐国には高松、丸亀、多度津の3藩があった。廃藩置県に際し、各藩は多度津を除き、そのまま新県になったが、まもなく伊予の中東部は石鉄県に、南部は神山県になり、明治6年2月、石鉄・神山の両県を合わせて第1次愛媛県が誕生した。一方、讃岐国は第1次香川県→名東県→第2次香川県をへて明治9年8月、愛媛県に併合されたので10年8月、中学区を改編した。

この直前の7月22日、郡区町村編制法、府県会規則、地方税規則のいわゆる三新法が公布された。地方税の教育費支弁は府県立学校費と小学校補助費に限られ、民費で設置された中学校に地方税は支出できない。13年3月に着任した新県令・関新平は新事態に即応して次の方針を打ち出した。即ち従来^さの県費補助を正規の地方税支給とみなす。もとより少額の地方税で中学は維持できないから従前の資産を残し、これで運用する。中学への志望者は士族が多いから中学校の位置は旧藩の城下町になる。しかし中学校の維持運営は県庁と地方

(この場合は郡)との協力でなりたつのだから管理運営は郡長に委任するという士族にとって虫のよい方針を打ち出したのである。[表3]を見られたい。8校のうち、7校が城下町、旧藩校跡、陣屋跡にたてられていて士族中学校たること歴然としている。

〔表3〕 明治14年・愛媛県立中学校の位置と準備金

県立中学校名	中学位置	準備金(県費700円を除く)
高松中学校	旧高松藩城下	民有準備金 凡ソ 3,200 円の利子
飯山中学校	鵜足郡下法軍寺村	協議費 凡ソ 300 円
亀山中学校	旧丸亀藩城下	民有準備金 1,600 円の利子、有志寄附
西条中学校	旧西条藩陣屋跡	民有準備金 1,000 円の利子、協議費
越智中学校	旧今治藩城下	協議費 凡ソ 800 円、有志寄附、授業料
松山中学校	旧松山藩校跡	学資金 1 万 600 余円の利子
共済中学校	旧大洲藩城下	民有準備金 2,750 余円の利子
南予中学校	旧宇和島藩城下	民有準備金 8,800 余円の利子、授業料

〔明治14年愛媛県年報〕〔文部省第9年報2〕580～584頁〕によって作成。

以上が以後、考察をすすめる伊予中学校史の前提になるものだが、この地方の特徴を見ておこう。平安時代の承平・天慶年間(931～947年)、平将門、藤原純友の反乱が起きた。純友は平安貴族の末端であるが伊予の日振島を根拠地に船千余艘を率いて各地で掠奪を行なった。将門が常陸の国府を襲撃するや、純友はこれに呼応するかの如く京へ士卒を送り放火させたという。京都の藤原政権も黙視できず、追捕使として伊予の純友本陣を攻撃。純友は討たれ乱は鎮圧されたのである。以後、京都の藤原政権は衰え、源頼朝による武家政権ができたことは歴史が教えるところである。将門、純友の反乱については京の藤原政権の不手際、墮落をあげる者もあるが、そのようなことは政権が長く続けばいくらでも起こることである。私(神辺)は瀬戸内の海族(海賊)が塩や海産物を加工して乾物化したものを販売したことが、こののはじまりと思っている。瀬戸内海の沿岸ならどこでも塩ができるし、魚介類の乾物など漁師なら誰でもつくれる。塩も魚の乾物も農民にとっては喉から手が出るほど欲しいものであった。瀬戸内海沿岸の舟乗りや漁師たちは塩や魚の乾物を持って山城摂津あたりの住民に

売りつけたであろう。なかには鳴門の難所を乗り越え、黒潮とつかず離れず東国まで出稼かせぎした者もあったろう。これが商あきないの事ことはじめてである。之を要するに瀬戸内海を囲む山陽及び讃岐、伊予の国々は舟をつかって商業を開拓した先覚者なのである。その最初であれば多少荒かこっぽいことをしても仕方ない。私はそのように考えている。

中世といわれる時代、伊予の国には海族（海賊）まがいの水軍を持つ豪族が散在していた。代表的な河野氏は高縄半島の北・越智郡から南・温泉郡までを領地として瀬戸内海に睨げんこうみをきかせていたが、元寇の国難に際しては進んで対馬海峡に出撃し敵船と戦っている。安全保障裏に大陸文化を輸入してきたのは瀬戸内水軍の余映ではないだろうか。

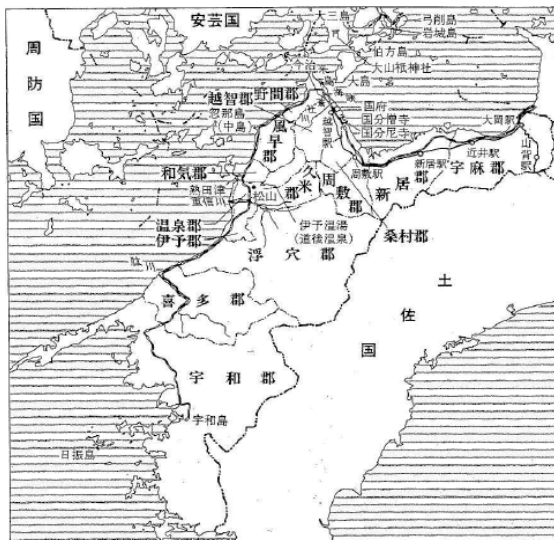
再び〔表1〕を見られたい。廃藩置県の際の状況を伊予8藩と言うけれども現実は松山藩15万石と宇和島藩10万石の二つで、それが松山いしづち県→石鉄県、宇和島県→神山県と展開して愛媛県に結実したのではないか。されば伊予に拡がる群小県は無視して松山、宇和島2藩2県の動向を探索すればよいと肚はらを括くくつた。

松山藩15万石は徳川家康の異父弟定勝を祖とする。家康の母・於大の方さだかつ（伝通院）が松平広忠と死別おだいした後、久松俊勝に再嫁して生まれたのが定勝である。定勝の子・松平定行が寛永12（1635）年、松山に入封して以来、230年間、この地を支配した。明治元年、新政府に松平姓から久松姓への改姓を命ぜられ、分家から入った久松定謨ひさまつさだことが当主となった。定謨は明治16年、フランスに留学し、20年、同国の陸軍士官学校に入学、卒業後フランス陸軍士官としてしばらく彼の地にあったが、24年帰国、日本近代陸軍の枢要な地位を一つずつ登り大正9年、陸軍中將になって待命、予備役になった。彼がフランス陸軍士官学校生徒であった頃、久松家の家臣であった陸軍騎兵大尉秋山好古よしふるがフランス騎兵戦略修得のために留学し帰国後、日本陸軍騎兵集団を育成して日清日露戦争に輝かしい武勲をたてたことは司馬遼太郎の名作『坂の上の雲』に活写されている。

伊予の西南、宇和島〔図2〕を参照)に根を張った伊達家は徳川將軍家と密接な間柄^{あいだがら}で幕藩体制ができるはじめてから10万石のこの地を授けられた。幕末の藩主・宗城は島津斉彬、松平春嶽、山内容堂と並んで^{おねなり なりあきら しゆんがく やまのうちようどう}「四賢侯」と称された人物であるが明治以後、才能を発揮する官職がないまま狩猟その他を楽しんで過ごした。

明治12年、愛媛県立南予中学校として設置された県立宇和島中学校は「旧宇和島藩の設立に係る明倫館を以て本校の濫觴とす」と強調しているが、明治15年、愛媛県を巡視した文部省大書記官・西村茂樹は次のように報告している。「南予中学校ハ県下中学校中第一ノ大校ナリ。教科ハ漢書・英書・洋算ノ三科トス。…全科ヲ分ツテハ級トシ四年ヲ以テ卒業ノ定期トス。毎日ノ授業時間ハ漢書二時、英書二時、算術一時ト定ム」「校舎ハ本年ノ新築ニシテ四千八百五拾九円余ヲ費ヤシテ建ツル所ナリ。目今教員十名、生徒百七拾九名アリ。設置以来、卒業生ノ数二人アリ。生徒ガ英学ノ力ハ県下他ノ中学校ノ生徒ニ憂レルヲ覚ユ。又此校ハ目今八千九百五拾三円余ノ積金アリ。是又他ノ中学校ニ見ザル所ナ

〔図2〕 伊予国



り」と。南予随一の中核的中学校になったことは明らかである（〔表4〕〔表5〕を参照）。現宇和島東高等学校である。

〔表4〕 明治15年、愛媛県立中学校の収入内訳

収入内訳	高松中学校	飯山中学校	亀山中学校	西条中学校	越智中学校	松山中学校	大洲中学校	南予中学校
	円 銭 厘	円 銭 厘	円 銭 厘	円 銭 厘	円 銭 厘	円 銭 厘	円 銭 厘	円 銭 厘
前年繰高	89,44,4	258,10,4	2,305,96,7	428,35,5	439,78,2	84,31,2	496,77,3	8,828,73,9
準備金利子	134,46,8		224,88,4	275,		1,186,28,1	198,32,3	1,083,01,4
協議費		504,			265,76,9			645,97,
寄附金			382,63,1		83,50,			1,
授業料	16,74,1		46,15,	53,	62,30,	147,	57,95	135,10,
地方税	700,	700,	700,	700,	700,	1,000,	700,	1,000,
雑納金	79,50,		28,51,4	13,	33,52,	7,90,	3,21	184,93,4
	円 銭 厘	円 銭 厘	円 銭 厘	円 銭 厘	円 銭 厘	円 銭 厘	円 銭 厘	円 銭 厘
計	1,020,15,3	1,462,10,4	3,688,14,6	1,469,35,5	1,584,87,1	2,425,49,3	1,456,25,6	11,878,75,7

明治15年愛媛県年報（『文部省第10年報2』pp678～685）によって作成

〔表5〕 1878～83年、愛媛県立中学校教師数・生徒数

年	1878年		79年		80年		81年		82年		83年	
	教師	生徒	教師	生徒	教師	生徒	教師	生徒	教師	生徒	教師	生徒
高松中学校	7	70	6	75	5	65	4	48	5	27	7	97
飯山中学校							4	52	4	78	4	65
亀山中学校					4	38	4	36	3	47	5	53
西条中学校					5	61	4	62	4	50	3	45
越智中学校							4	26	6	57	7	83
松山中学校	11	205	10	135	9	188	9	107	11	122	11	146
大洲中学校	6	77	5	60	5	40	4	47	5	68	7	59
南予中学校	9	195	10	166	12	147	11	160	11	118	11	95

明治11～13年、15年、16年「中学校表」（『文部省第6年報』～『同第8年報』『同第10年報』『同第11年報』所収）「明治14年府県学校表」（国立公文書館蔵）によって作成、学校名称は明治16年のものとした。

参考文献

- 『文部省年報』所収の当該年「中学校表」
- 影山昇『愛媛県の教育史』（思文閣）
- 田中歳雄『愛媛県の歴史』（山川出版）
- 長坂金雄『全国学校沿革史』
- 神谷次郎・祖田浩一『幕末維新三百藩総覧』
- 千田稔『華族総覧』

大東文化大学教授酒井清六（生物学・化学）のインタビュー
—学生サークル誌『エリキサ』第15号（1992年12月）掲載—

たにもと おねお
谷本 宗生（大東文化大学）

本学・大東文化大学の教養課程で生物学・化学を担当した、酒井清六の半生や研究者へのきっかけをインタビューにて示している、学生サークル誌『エリキサ』第15号（1992年12月）掲載記事を少し紹介してみたい。酒井は、大東文化大学にて教養部長（任1969年4月～1970年3月）、教養課程委員会委員長（任1970年4月～1972年3月）を務めた人物である。

インタビューの前提として、記者による「取材メモ」（取材記事）として、酒井教授が保有する研究資料について、次のように誌面では率直に言及されている。

本棚の本は、ほとんど全部がハサミムシに関する文献だそうです。私たちと同じくらいの年齢であった学生時代から、ハサミムシに関する文献を集めたそうです。以来50年、全部先生が自分の足で集めて、現在世界一のハサミムシの関係文献が先生の研究室にコレクションであるそうです。集め出した当時はコピーがなくて、手書きで複写したそうです。先生いわく、学者は根気で一つのことに熱中できる情熱がなければだめですと。

酒井の学問へ傾倒していくきっかけなどを問われ、次のように幼い時分から始まり、学生時代の変遷などについてたいへん興味深く、酒井は半生を答えている。

私は生まれも育ちも、日本橋・浜町のチャキチャキな江戸っ子です。子どものときから、小岩や市川へ自転車で、日本橋から網を持って昆虫を採りに出かけていたのです。旧制中学生のときには、すでになんかの昆虫好きになっていました。普通、昆虫好きな人はチョウやカブト虫などに興味を持ち、詳しいはずですよ。それで、私は旧制中学生のときによく考えました。どうせなら、人のよくやっていることではつまらない。だから、人のあまりやらないことをあえてやってみようと思いついたのが、ハサミムシだったのです。ハサミムシの型はクワガタを逆にしたものだ気づきました。それで、ハサミムシの研究をしようと思いました。

その当時、森永キャラメルでのちに私の恩師となる、東京高等農林学校の石井悌先生が、昆虫のマンガで解説をなさっていたのです。だから、私はその石井先生が教えている学校へ進学したいと思いました。農業はまったく知りませんでしたが、大好きな昆虫学を東京の近くで勉強できる学校はそこしかなかったのです。それで、その高等農林学校へ進んで、生物学を学びました。それから、さらに京都帝国大学に進学しました。

不幸にも我が国は戦争中であり、次第に状況の悪化にともない、学生らも実際に戦争に駆り出され始めました。私もどうせ戦争で死ぬのなら、好きなハサミムシの論文を書きたいと思い、京都帝大に入ってから毎日、ハサミムシの研究文献の複写を熱心にしていました。しかし、戦時下に国内の文献だけでは残念ながら、ハサミムシの研究は十分にできずだめだと思い、方向転換をして殺虫剤の研究をしようと考えたのです。殺虫剤を研究するには、どうしても化学が必要だったので、化学の勉強もしたのです。

私が27歳のときに、名古屋大学の助教授に抜擢されました。結婚もしました。その翌年でしたが、兄が亡くなり兄の子ども4人が残されてしまいました。そこで、私は大学を辞めて、八洲化学工業という民間会社に入り働きました。その後、兄の子どもも十分に成長したところで、また元の研究の道に戻りたいと思い、どこかよい大学はないかと探していたときに、大東文化大学に採用されることが決ま

ったのです。着任時、生物学をと思っていたのですが、すでに和田先生がいらっしや
ったので、私は化学を教えることになりました。私はもともと昆虫学者ですから、
今では本学で生物学も教えています。

上述のインタビュー記事からは、実際に大学教員を務めた酒井の人となりや
学問への真摯な考え方やその直向きな姿勢などがよく伝わり、とても興味深い。
大学の教育・研究活動面を検討する際に、主な担当教員・主要人物らに着目し
て考察を試みることはやはり有意義であるだろう。

大正時代の女子高等教育(71)

神戸女学院草創期に貢献した女性宣教師たち

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

神戸女学院大学の基礎を築いたのは、米国伝道会から派遣された女性宣教師たちであった。明治・大正・昭和にかけて、少女たちに英語を教え、キリストの教えを通して人の道を説いた。変化する日本の情勢に戸惑い、時には病に倒れながらも学院の発展のために献身した6人の女性たちを紹介しよう。

E.タルカット女史(初代校長)とJ.E.ダッドレー女史

明治8年10月、神戸女学院の前身校を創立したのはタルカットとダッドレーである。タルカットは米国東部で著名な、ミス・サラ・ポータ寄宿学校に学び、ニューブリテンの州立学校に学んだ後、母校のミス・サラ・ポータ寄宿学校に教師として招かれた。病弱のおばの看護に十年間あたった後、日本伝道を志した。タルカットは誠実で毅然とした性格を内に秘め、謙遜なニューイングランドの女性であった。ダッドレーとともに神戸で「女学校」を開校し、責任者となった。背が高く、やせ型ながらしっかりした体格である。初期の寄宿生たちが、タルカットを「お父さん」に、ダッドレーを「お母さん」になぞらえていたという。日清戦争時伝道していたタルカットは自ら広島に赴き、赤十字社の病院で看護婦として傷病兵のために働いた。「日本のナイチンゲール」と呼ば



初代校長 E.タルカット
『神戸女学院の125年』
より



J.E.ダッドレー
『神戸女学院の125年』
より

れた。明治42年、第4代ソール院長はタルカットの誕生日5月22日を創立者記念日に定めた。

ダッドレーは、ロックフォード・セミナリーに学んだ後、数年教職に就き、母親を看取った後、日本伝道に応じた。ロックフォード・セミナリーは後年カレッジとなり、神戸女学院と姉妹校となった。容姿はきゃしゃだが、天性のユーモアを身に着け、活動的でタルカットとは好対照であった。主に寄宿舎の世話をし、生徒たちから母親のように慕われていた。キリスト教精神の裏打ちがある優しさを持っていた。『まごがてくさ育幼冊』という本を書き、育児の手引きを通して神と人との正しい関わりにあるまじめな生き方を説いている。梅林にすぎなかった神戸の諏訪山を学校建設地に選ぶ等、洞察力・決断力があつた。女学校の支援者となる旧三田藩主九鬼隆義の夫人に招かれて、三田を訪ね、熱心に伝道した。土地の少女たちに非常に慕われ、神戸女学院の前身となる寄宿舎を備えた「女学校」設立のきっかけとなった。

二人が来日することになった明治の初めのころは、日本の至る所に「切支丹禁制」の高札が掲げられており、カトリック教徒の流刑が続けられていた。そのような時期に日本への伝道を決意した二人の勇氣は素晴らしい。二人に面識はなく、明治6年の出発の日、日本向け定期船の船上で初めて会った。両女史は生徒たちを日本の伝統的な生活様式の中で、育てていこうとした。学校での授業が終わると、それぞれ生徒たちの家を一軒一軒訪ねてその家族に対する伝道を行った。学校が軌道にのると、タルカットは校長として、ダッドレーは寮監として活動した。

V.A.クラークソン女史(第二代校長)

明治10年11月、着任した。マサチューセッツ州の出身で、マウント・ホリヨーク・セミナリー及びサレムのノースル・スクールに学び、数年教職を経験した。



V. A. クラークソン
『神戸女学院百年史』
総説より

マウント・ホリヨーク・セナリーは、19世紀前半にメアリー・ライオンが創設した女性の地位を向上させ、女性の知的レベルを向上させることに情熱を傾けたアメリカ最古の女子高等教育機関であった。1893年カレッジに発展し、19世紀後半の女子大学設立運動に大きな刺激を与えた「女子大学の元祖」である。

デフォレスト女史(第五代院長、後述)は、クラークソンを「鋭い知性、高い理想、神経質な気質の女性」と評している。実は、クラークソンはトルコの伝道を熱望していた。しかし、1877年4月に始まった露土戦争のためにトルコ伝道を断念し、日本伝道に決定した。クラークソンは自身の健康について不安を抱いていた。日本に到着して第一週目に風邪をひき、リウマチで悩んだ。タルカットらは病身のクラークソンを労り、校務につけなかった。しかし、クラークソンは、自身の健康について神経質でありながら、活動的で積極的であった。クラークソンは、タルカットらが校外に出て伝道などの任務に従うことを良しとしなかった。12年夏ごろまでにはクラークソンが学校の全権を担うようになり、タルカットとダッドレーは神戸を去った。

クラークソンは校長に就任すると、改革を始める。校名を「英和女学校」と改め、五年制の新組織に改革した。クラークソンの構想は日本女性に対する高度の知的教育にあった。とくに日本女性に欠けていた自然科学教育に力を注いだ。宗教教育は学校教育を通じて行われるべきとした。

しかし、明治14年発病し、静養を余儀なくされた。学校の財政悪化が一因と思われる。クラークソン構想による最初の卒業式に列席したいと強く希望を抱きながら、唯一の身内の祖父の死をきっかけに帰国せざるをえない体調になった。

E.M.ブラウン女史(第三代校長)

クラークソン校長の代行を務めていたタルカットに代わって、第三代校長に就任したブラウンは、ミネソタ



E.M. ブラウン
『神戸女学院百年史』
総説より

州南部の開拓農場に生まれた。幼年時代から学問を好み、中学校卒業後大学に進学しようとしたが、家庭の事情により困難であったので、小学校教員などを勤めながら自分で学資を調達し、1882年、カールトン・カレッジを優秀な成績で卒業した。米国伝道会に選抜されて日本伝道に従事するため、明治15年11月来日し、英和女学校に着任した。24歳であった。ちなみに明治15年11月20日、横浜港に着いた船は英国の蒸気船の“Arabic”で、その船には、津田梅子と山川捨松も乗っていた。梅子と捨松は明治4年政府派遣の米国留学生として渡り、11年間の勉学を終えて帰国したのだった。後に梅子は東京で、女子英学塾（現津田塾大学）を創立する。ブラウンは英和女学校に西日本初の高等科すなわちカレッジを設置する。学制の整備をして、高等科の設置や同窓会の設立などに尽力したが、国家主義が台頭し、西洋文明に対する反動期になり、心身の疲労から明治25年11月病気のため帰国した。

帰国後、1903（明治36）年に結婚してハークネス夫人となり、年長で病身の夫の介抱と自身の闘病に明け暮れながらも、教会の聖書講義に奉仕した。夫が亡くなった後、実家に帰って老母を養ったが、老母が亡くなった翌年、1925（大正14）年5月、ハークネスも亡くなった。67歳であった。

ハークネスの人柄は、“博学多能で、理科・神学から洋裁・唱歌まで教えた。日本語に熟達し、日本人の意見をよく採用した。広く人と交わり、卒業生で妻となり母となろうとする者には、慈母のように懇切に教訓した。自身の経験から苦学生に多大の同情を寄せ、勉学の道を開くために尽力した”等と、ハークネスのための記念会で有志から追悼された。故人は、学校に遺贈金を計画していた。長年の療養生活のために出費が多かったにもかかわらず、英和女学校に予定した寄付金を減額しようとはしなかった。同窓会はその遺志をくみ取り、記念基金を募集し、2,200円余を得て、ハークネス記念奨学金として、昭和8年学院に譲渡した。

S.A.ソール女史(第四代院長)

明治16年10月、英和女学校に着任した。ミシガン州ナイルの一工匠の長女に生まれた。両親は堅実な清教徒であった。ポストン外のウェルズレー・カレッジ卒業後、カールトン・カレッジの予備教授に就任し、2年間在職した。したがって、第三代校長のブラウンがカールトン・カレッジを卒業したのは、ソールの在職2年目であった。互いに知り合っていたと思われる。ソールの方が一歳年上であるが、英和女学校教師としてはブラウンの方が一年先任者であったので、ブラウンが校長に就任すると、ソールは教頭のような立場で校長を補佐した。



S. A. ソール
『神戸女学院のもの
がたり』より

ブラウン校長代理時代(25年11月~32年8月)、西洋崇拜の時代からがらりと変わって国粹主義、排外主義が勃発し、特にキリスト教に対する排斥が強くなった。日清戦争が始まるとさらに国家主義が強まった。そうした中でソールは、学校を上げて国に協力し、寄付金を集めて毛糸帽子を作り、広島の赤十字病院に寄付した。文学会・音楽会を公開して入場券を売り、純益を軍人遺族補助費に寄贈した。

また、日本風の礼節・家政・裁縫の教場となるような建物を建設し、生徒が動き易いように袴の着用を勧めたり、32年には学年の開始をそれまでの9月から4月に変更したりして、日本の慣習に合わせて、世間に受け入れられる努力を惜しまなかった。ブラウン校長の片腕となってひたすら学校のために尽くし、明治24年健康を害して一時帰米したが、25年以来ブラウン校長不在後は校長の役目を果たし、27年には「カレッジ」にふさわしいようにと、校名を「神戸女学院—Kobe College」と改称した。38年8月、ブラウン校長辞任につき、院長に就任した。英語会話・英語読本・英作文・和文英訳・数学・体操等、音楽以外の高等科の学課のほとんどを教授した。逆風の中で、カレッジとして高等科を充実させ、専

門学校令による「専門部」に昇格させ、一方で日本の慣習に合わせて世間から愛される学院作りに工夫を重ねた。しかし、大正4年再び健康を害して帰米し、静養したが、同年9月院長職をデフォレストに譲り、辞任した。

名誉院長に推された後も学院内に留まり、英語・聖書を担当し、新院長を助け、不在の折は院長職務の代行を行った。昭和3年、満70歳となり、宣教師の定年に達し、日本を去らなければならなくなった。4年7月5日、45年にわたる日本女子教育に対する貢献(内24年間は校長代理・院長という責任者を務める)により、藍綬褒章を授与され、同月7日神戸港を出帆した。昭和9年岡田山の新校舎落成式に招かれて来日した。晩年は米国で教会活動に奉仕し、1951(昭和26)年10月25日、昇天した。94歳であった。岡田山の新校舎の礼拝堂にソールの名が冠せられた。

C.B.デフォレスト院長(第五代院長)

デフォレスト院長は、明治12年に大阪の川口居留地で、宣教師デフォレスト博士の次女として生まれた。新島襄から幼児洗礼を受けている。一時仙台で過ごし、14歳でニュートン・ハイスクールに入学、3年後スミス・カレッジに進み、カレッジ在学中に外国伝道に献身することを決意。明治36年12月、日本の伝道に従事することになり、横浜に帰着した。仙台の実家で日本語を勉強し、38年1月、神戸女学院の教師となり、聖書・音楽・英語等を教授した。44年末から大正2年9月まで帰米し、亡父の伝記を書いた。その後女学院に帰任し、4年9月、36歳のとき、女学院五代目の院長に就任した。昭和15年1月、病気によって退任するまで25年間院長を務めた。ソール院長時代に充実された学院はさらに一大発展を遂げた。



C. B. デフォレスト
『神戸女学院のものがたり』より

大正13年4月、米国議会で排日移民法案が通過した時、米国議会の非友好的行為や人種的差別がキリストの精神に反することを遺憾などとして、デフォレスト院長以下学院の米人教師一同、日本人教師一同、中部婦人伝道会も、法案について抗議の決議文を公表した。キリスト教精神による平和・平等の精神を持つバランスのとれた人物だった。

明治30年代後半から国家主義が強まる一方で、欧米文化の流入により自由主義的風潮が広まり、特に知識階級の間にはキリスト教に理解を持ち、同感を抱く者が多くなった。キリスト教の教会及び学校は傷病兵の慰問などによって国家に対する忠誠を示し、自由主義者の支持を集め、順調な発展を遂げた。第一次世界大戦後の講和会議、軍縮会議などにつれて国際協調主義が強調された。政党活動が活発になり、昭和3年2月、普通選挙が行われるに至り、自由主義は最高潮に達する。

大正4年11月10日、大正天皇の即位を祝う、学院の御大典奉祝式の訓話で、デフォレスト院長は“…キリストが『なんじらのうち最も大いならんと思う者は人に奉仕する者なれ』と説いてから、王権に関する人々の思想が変わり、王たる者は人に仕える機会を与えられ、人のために最も力を尽くした人をいうと解釈するようになりました”と述べた。神の国、日本においては多くの人に奉仕する者こそ天皇にも比すべきことを示唆したのである。ブラウン校長、ソール院長時代には思いも及ばなかった発言であった。

まとめ

創立者タルカット女史は、卒業生がいかなる家庭環境に置かれても、日本の伝統・習慣に順応しつつ聖書を説き福音を証する質実・篤信の人となることを願った。しかし、クラークソン女史はそういう保守的な校風にあきたらず、英語や教養科目を多く加えた五年制中等教育の新課程を提案した。伝道本位の学校の性質を一変して、教養本位の学校とした。

ブラウン校長、ソール院長によって学制整備が行われ、高等科が充実された。さらにデフォレスト院長により、「本当の女子大学」にしようと挑んだが、政府の厚い壁により、あきらめざるをえなかった。しかし、名称は専門部でも中身は男子の大学にも劣らない学課と授業内容で学生を育てた。

多くの教育者、研究者を始め、アメリカ留学を経て、日本で活躍する人材を育てた神戸女学院の高等教育機関としての、「専門部・大学部」の存在は大きかった。美しい建物とともに神戸のシンボリック的存在となり、現在の神戸女学院大学（西宮市）に継承されている。そしてそれは、多くの米国人女性宣教師らの、キリスト教伝道というミッションを越えた愛と奉仕の精神によって礎が築かれたのである。

参考文献

- 『神戸女学院五十年史』
- 『神戸女学院百年史』総説
- 『神戸女学院百年史』各論
- 『神戸女学院の125年』（1875～2000）
- 『神戸女学院のものがたり』

進学案内書にみる戦前期東京の予備校(5)

:『最近東京遊学案内』(明治40年)(3)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

今号では、東華堂より刊行された受験学会『最近東京遊学案内』の1907(明治40)年の「第八章 雑種諸学校」に掲載された予備校の情報を見ていく。今号は前号に掲載できなかった4校の情報である。

維新学館

位置 東京市神田区小川町

目的 本館ハ諸官公私立学校入学志願者又ハ専修者ノ為メニ速成ニ教授スルニアリ

学科及修業年限 学科ヲ類別シ受験科、速成科及ビ随意科トナシ修業年限ヲ一
個年ト定ム

入学資格 本館ニ入学ヲ許可スベキ者ハ年齢満十四年以上ノ者ニシテ、高等小
学第二学年ノ課程ヲ卒ヘタル者又ハ之ト同程度ノ学カヲ具フル者タルベシ

学費 入学セントスル者ハ入金トシテ最初金一円ヲ納ムベシ生徒入学ヲ許可
セラレタル時ハ月謝トシテ毎月金一円ヲ納付スベシ

研数学館

位置 東京市神田区猿楽町

目的 本館ハ各種高等学校受験者ノ為メニ数学及ビ理化学ヲ教授スルヲ以テ
目的トナス

学科及修業年限 学科ヲ分子普通速成科、初等速成科、理化学速成科ノ三科ト
シ各科共之ヲ甲組、乙組、丙組ノ三組ニ分ツ

入学資格 本館ニ入学セントスル者ハ年齢満十三年以上ニシテ高等小学第二
年級ノ課程ヲ卒ヘ若クハ之ト同等ノ学カヲ有スル者タルヘシ

学費 入学セント希望スル者ハ束修トシテ金五十銭ヲ納入セラルベク尚ホ学生
入学ヲ許サレタル時ハ月謝トシテ金七十銭ヲ納付スベキ者ト定ム

順理学舎

位置 東京市神田区裏神保町

目的 本館ハ諸官公私立学校ヘ入学セント欲スル者又ハ専修者ノ為メニ速成ヲ
旨トシ数学ヲ教授スルヲ以テ目的トナス

学科及修業年限 学科ヲ類別シ初等科、中等科、高等科トシ授業時間ヲ午前、
午後、夜間ノ三部ニ区分ス

入学資格 入学セントスル者ハ年齢十二年以上ニシテ高等小学校第二年級ノ
課程ヲ卒ヘ又ハ之ト同一ノ学カヲ有スル者タルベシ

学費 本舎ハ束修ヲ要セズ生徒入舎ノ上ハ左ノ区別ニ従ヒ授業料ヲ納付スベシ
尚ホ教場費トシテ毎月金十銭ヲ課セシム

初等科 金四十銭

中等科 金五十銭

高等科 金二円

順天求合社

位置 東京市神田区仲猿楽町

目的 本社ハ数学ノ普及ヲ図リ且ツ官公私立諸学校受験者並ニ年齢既ニ長ジ
業務ノ余暇ヲ以テ数学ヲ修メントスル者ノ為メニ速成ヲ以テ算術、代数、幾何、三
角術等ノ諸学科ヲ教授セントスルニアリ

学科及修業年限 修業年限ヲ三個月ト定メ生徒ヲ甲組、乙組ノ二部ニ分ツ

入学資格 入学セント欲スル者ハ年齢満十四年以上ニシテ高等小学ノ課程ヲ
卒ヘ若クハ之ト同等ノ学カヲ有スル者タルヲ要ス

学費 本社ニ入舎セントスル者ハ入学金トシテ金五十銭ヲ納付セラルベク生徒
入学ノ上ハ一ヶ月授業料トシテ金七十銭ヲ納入セラルベシ

次号からは、後の年の『最近東京遊学案内』を検討し、これらの情報がどのよ
うに変化していくのかを見ていくことにする。

旧制灘中学の教育目標と生徒の活動(11)

とみおか まさる
富岡 勝(近畿大学)

はじめに

ここ1年間ほど、旧制灘中学校の教育目標や生徒の活動についての史料を扱い、第114号からは、灘中学校の教頭であった曾我豊吉についての史料を紹介している。第114号では、嘉納治五郎顧問や眞田範衛校長の就任よりも前の1923年から設立運動を開始していたことを、第115号ではこの設立運動において「個性尊重」「国際的観念」「人類相愛」「趣味や審美的観念」などの教育方針をもつ中学校の設立がめざされていたことを述べた。

本号では、『灘』第21号(1937年3月1日)に掲載された曾我豊吉の「訓話」などを通して設立運動に関してもう少し紹介してみたい。

中学入学難

設立運動を開始した理由として曾我が挙げたのは、中学校の入学難問題であった。

私は御影師範附属に関係してゐたので五年六年の児童が入学の勉強のために心身をさいなんでゐる様子を目のあたり見たのであります。甲陽甲南、外にも学校はありましたが、それだけではどうしてもならず、六倍七倍の入学率に子も親も困つてゐたのであります。これではいかぬ、この入学難を緩和するためこの附近にどうしても一つの中学校を設置しなければならぬと思ふ様になつたのであります。

(『灘』第21号、1937年3月1日、2頁)

曾我は1916年5月から1923年7月までに御影師範学校の附属小学校主事をつとめており(『兵庫県立御影師範学校創立六十周年記年誌』(同窓義会

編纂・発行、1936年、313頁)、当時、附属小学校の5年生・6年生たちが、6倍以上の競争倍率のもとで受験勉強に心身をすり減らしている様子を目にしてきたというのである。公立中学に加えて1917年に私立甲陽中学(1920年からは辰馬学院甲陽中学校)が、1919年には甲南中学校が設立されても、入学難が解消されなかったらしい。中学入学難が曾我にとって、設立運動開始の重要な理由であったと指摘できるだろう。

御影師範附属小学校保護者会の有力メンバーの協力

曾我の「訓示」から分かることの2点目は、次に、御影師範附属小学校保護者会の有力メンバーが協力していることである。

のちに灘育英会(灘中学校を経営)の常務理事になった日高驥三郎は、御影師範附属小学校保護者会の理事をしていて、曾我の考えに協力して設立運動に加わったことが以下の記述から分かる。

当時日高先生は附属の保護者会の理事でありましたが私の考へを大に賛助して下さいましたのであります。

(『灘』第21号、1937年3月1日、3頁)

さらに、保護者会の役員であった岸田空、羽室庸之助、池原鹿之助が曾我の話聞いて賛同し、曾我といっしょに嘉納家などを訪問していることが分かる。

私は、こんなに五年、六年の児童がやせるほど勉強して困るが、何とかしてこの付近に私立中学を設置することは出来ないだらうかといふことを保護者会の役員であつた岸田氏、池原氏、羽室氏等に話したのであります。ところが大いに賛成され、共に嘉納翁を訪問してお話したところ、大に賛成はして下さいましたが其の時には設立者とはなられなかつたのであります。そこで今度は嘉納純氏にお話してご紹介を得てその父君である嘉納治兵衛翁にお

話したところ「私立ではうまくいかんから県立にしてはどうか。」といふ様なお話もあつたのであります。私は私立の中学校にしたいといふ考へを固く持つてみたのでありますから、その御諒解を願ひました。又そのことについて前文相であります平生氏にもお話したのでありますが平生氏は工業学校にしてはどうか、それなら私も考へてみようといふお話であつたからそのまゝ別れたのであります。私はどうせ学校を設置するなら入学難を緩和するといふだけではなく、理想的な学校にしたいと思ふので其の後も両嘉納家にかがつて種々談合したのであります。又一方には魚崎町の山邑代議士にも御相談いたしましたところ大いに賛成せられ一方ならぬ尽力をして下さいました。さるほどに両嘉納家に於ても更に御考へ下され、進んで設立者となることを快諾され、魚崎町の山邑太左衛門氏と共に三家御協力の結果ここに本校創立の曙光が見えたのであります。

(『灘』第21号、1937年3月1日、3頁)

このように、灘中学の設立運動は、御影師範附属小学校の教頭が首唱し、保護者会の理事や役員が賛同してともに設立運動を担ったことがわかる。つまり、灘中学校は御影師範附属小学校の関係者によって設立運動が始められたということもできるだろう。

私立中学校を目指す

曾我の「訓示」でさらに注目したのは、設立運動が公立中学校ではなく、私立中学校の設立を目指した点である。先述の史料でも、私立中学校を設立したいと述べる曾我たちに対して、嘉納治兵衛は当初、「私立ではうまくいかんから県立にしてはどうか。」と述べたと記されている。

曾我は、私立中学校設立を目指した理由を次のように述べている。

私は思ふ、一体私立とはどこが違ふのであるか、それは経費の出所が違ふだけの事ではありますが、しかし我々の考へてゐるのは理想的な学校をつくることで、たゞ学校さへ建てればいゝといふ様なことではなかつたのであります。たとえば公立であれば何かの設備をしたいと思つても、その予算が県会を通過しなければ手を出すことが出来ない、しかし私立であれば運動場をひろげたいと思へば財団の考へ次第ですぐ出来る様にしてもらへるのであります。かういふ点に於て私立は甚だ都合がよいのであります。又先生方は多年の経験と蘊蓄とをかたむけ一致協力して事にあたつてをられる、そこに私立に於ては生徒と先生との間に公立には見られないところの親しみがあるのであります。

(『灘』第21号、1937年3月1日、3頁)

御影師範学校附属小学校の教育

御影師範学校は、もちろん私立ではなく、公立(兵庫県立)であつたから、御影師範附属小学校の関係者が私立中学校の設立にこだわつたというのは、少し不思議な気がする。これは、おそらく当時の御影師範学校の教育と関係があるのではないかと思う。

『兵庫県立御影師範学校創立六十周年記念誌』(同窓義会編纂・発行、1936年)を少し読むと、曾我豊吉が御影師範教諭であつた1899年から1923年(うち、1916年から1923年は附属小学校主事を兼務)の御影師範および附属小学校が、先進的な教育を行つていたことを垣間見ることができる。

例えば、和田豊校長時代(1904年から1925年)には、教室内筆記不使用(つまり、ノートをとらない)授業が行われたり(408頁)、定期試験廃止の時期があつたり(481頁)、寄宿舎が火災で全焼(1907年)した後、自治的家族的寄宿舎(「甲陽村」と呼ばれた)がつくられたり(173頁)、雑誌『甲陽』が発刊(1908年)されたりといった、詰め込み教育ではなく、生徒の自発性を尊重する教育が試みられていたらしい。また附属小学校の教育の特色として、「公民教育」

「自治及自治組織」「公民教育」「郷土教育」「鑑賞教育」「教授における映画の利用」などが挙げられている。また、曾我が主事であった時期に「公開教授」（講師の講演、主事の講演、訓導の研究発表）が行われていたと記されている（375頁）。

こうした御影師範学校および附属小学校の教育の特色は、前号で紹介した「教育方針の要領」（設立運動で1923年12月に公表）に「個性尊重」などが盛り込まれていたことと無関係ではないだろう。

曾我たち、御影師範附属小学校の教員や保護者たちにとって、中学入学難のために高学年児童たちが受験勉強に追われて心身をそこなっている状態は、附属小学校の教育を行う上で由々しき問題であったかもしれない。また、中学校への進学後に附属小学校で受けてきた教育を活かせるのは、学校独自の教育を実施しやすい私立中学校であると曾我たちは考えたのかもしれない。また、もしかしたら公立中学校の問題点のようなものを感じていたのかもしれない（これについては、もちろん、神戸一中などの公立中学校の史料を読み込んで検討しなければ何ともいえないが）。

次号は、灘育英会常務理事となった日高驥三郎についての史料を紹介したい。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項(2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚〜4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

本年7月や8月中の新聞情報やネットニュースで、頻繁に取り上げられている記事に、夏休み中の都内にある学童保育・放課後児童クラブにて、希望者に対する昼食・給食の提供導入をようやく始めている自治体があるようだとのこと。昨年5月の子ども家庭庁の調査では、全国的に見ればまだ学童保育の2割程度の昼食の給食導入割合でしたので。たとえば、都内の武蔵村山市は今夏から、学校の長期休暇中に市内の全児童クラブでの昼食提供を本格開始したといえます。都内での学童保育・放課後児童クラブの昼食給食費用は、契約業者にもよるようですが、1食当たり300~400円はお弁当代でかかるよし。たしかに休み中の学童保育の子どもらの昼食へ給食導入は、親としてはありがたい試みだと実感しますが、家庭の経済事情もあるでしょうから、できるだけ休み中の給食費用の補助・支援を、行政サービスとして納得できる範囲で善処できたらいいですね。(谷本)

最近また増えつつある積ん読状態の本を、この欄を利用して少しでも読んで紹介してみたい。戦地性暴力を調査する会編『日本軍にみる性管理と性暴力 ——フィリピン1941~45年』(梨の木舎、2008年)は、防衛省防衛研究所図書館に所蔵されている、フィリピン関係陸軍戦史史料の中から、日本軍文書にみる性管理と性暴力をあらゆる資料を収録し、解題をつけたものである。もちろん敗戦時の焼却や散逸を免れて同図書館に残された1500冊あまりのフィリピン関係の文書から発見された資料が本書に収められている。たとえば「1章 慰安婦」には、「慰安所」「慰安婦」に関するもの、および強姦や虐待などが記述された資料が収録されている。軍が作成した複数の文書のなかに、「慰安所」「慰安婦」の記述がはっきり見られることがよくわかるという。また、フィリピン上陸当初より、略奪や強姦が頻々とおこなわれていたことが憲兵隊の記録に多数記されていることもわかった。略奪や強姦などの「非行」に対して、憲兵の処置は「嚴重説諭」などの比較的軽いものであり、重罪を科している事例は見られなかったと、本書で指摘されている。

戦地性暴力を調査する会は、「私たちは加害国の市民として、女性として、二度とこのようなことが繰り返されないうために、日本軍の戦争犯罪な性暴力の実態を明らかにしようと取り組んできました」と述べる。資料調査を続けていくことの意義と力を改めて実感した。(富岡)



会員消息

本年8月初め、前々から気になっていた携帯PCの新たな入手について、思い切ってネット携帯ショッピングにてASUS社製の15.6型ノートPC (AMD社Ryzen7コア、16GB、オフィスソフト付)を比較的廉価であった(今年の発売型みたい)ため購入しました。幸いネット在庫もあったとのことで、注文後の翌日にはもう手もとに届きました。おまけに、今の時代OSや基本ソフトの設定まで含め、開封後にして1時間ほどで直ぐに使用可能でした。正直、もう少しばかりのお金(数万円+α)を今回出せば、現状での最新型も入手できそうな勢いでしたが、PC素人の文系ユーザーが欲をかくては危険ですからね。実は、将棋棋士の藤井竜王・名人が、日々の研究に対しAMD社コアのPCを愛用している話を以前から聞いてちょっと興味ありましたので、私もAMD社コアの使用は初体験です。(谷本)

学校に勤務していると、「情報のアップデートが必要だな…」と感じることが多々あります。かといって、どこかに通って学ぶ時間もお金もないので、eラーニングやオンラインで学べる環境を探しました。

今年は、下記のeラーニングを受講することにしました。

新たな学びのためのeラーニング講習「eきょういん」夏期講習

- ・(旧)教員免許更新講習として開催されてきた、信頼と実績の有意義な講習となっております。
- ・新たな教師の学びとして、こども園、幼稚園から高等学校までの教員の方に相応しい内容となっております。
- ・講習と認定試験をすべてオンラインで受講できます。

(出典)新たな学びのためのeラーニング「eきょういん」(2024年7月16日確認)
<https://e-kyoin.jp/>

なお、本講習は同朋大学・羽衣国際大学・新島学園短期大学などが開設しており、一般の方も受講できます。興味のある方は下記のサイトから詳細をご確認ください。

「eきょういん」公式サイト:<https://e-kyoin.jp/>

(八田)

本年度は勤務校の学生2人と、松本の旧制高等学校記念館に行く予定でしたが、台風10号のために夏期教育セミナーは中止になってしまいました。来年の夏期教育セミナーでお会いできるのを楽しみにしております。(山本剛)

山本さんが書いてくださっているように、今年の夏期教育セミナーが台風で中止になってしまったこと、本当に残念です。先日、いつのまにか60歳の誕生日を迎えてしまい、未熟なまま年月を重ねていることを実感しているので、来年の夏期教育セミナーでは、ぜひとも皆さんと研究を含めた交流をして、少しでも成長したいと思っています。

谷本さんがパソコンをAMDのCPU搭載のパソコンを購入した話を書かれていますが、私も5年ほどまえの中古でAMDのCPU搭載のパソコンで掘り出し物を見つけて購入しました。たしかに同じぐらいの価格帯のIntelのCPUが入ったパソコンよりも素早く動くのかなという気がしました。同時に、IntelのCPUは発熱が少なめで安定していることを改めて感じました。さらに、MackBookを使う学生が増えてきたことを口実に(動画の作り方などを授業で扱っているので)、これまた中古で4年ほど前のモデルのMackBookAirfで安いのを探して1ヶ月程前に購入してしまいました。触ってみて、Macはオシャレだけでなく、熱処理が優秀で画面も見やすく、よくできていると思いました。ただ、機能や互換性の面ではWindowsにも長所があることもよく分かりました。結局、それぞれに長所があるようです。パソコンをあれこれ試すのは私の場合、やや時間の無駄遣いですが、オリジナル企画のノートづくりと同様、少し楽しいです。中古パソコンについては、「用途に応じた最低価格」がなんとなくわかりますので、必要がありましたら気軽にお声がけください。(富岡)

本ニューズレターのPDFファイルをダウンロードして、Adobe Reader等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」に設定して印刷すれば、A5 サイズの小冊子ができます。